冨士御覧日記

永享四年壬子九月冨士御覧のため御下向あり初の十日京都
出御同十七日駿河國藤枝鬼巌寺に御下着雨すこし
晴れてあかつきまて月のひかりなとおもしろかりけるに御立同
十八日府中先小野縄をめして御輿をすゝめくらおもしろくて
その後左右よりみなみなあひて御路すからいまた若枝みとりのあまたの色
何となくけしきへ山あひ河をわたり紀のかけるとかや
御着府よりやかて冨士御覧の亭へすくに御あかり雪のことくみえて
みえつる伊豆の国思ふる人なとも程へてもおもはぬ事とも身にしられ
侍るへし

従四位源範政

君かこと祝ふ心もやすらけくわか君か代は八千代ふへし千とせ

十九日のあした御詠

朝日のさしのほるかたの高ねより雲もおこらぬ御代そしられ

此こゝろし　範政

久様なる月の雲井を今よりも千とせをいはふ朝日のひかり

又御詠

月雪のこゝろあるなる先の人世にはかりし秋の夜すかの雅

御返し　範政

月花に君か世を千とせ経てもかはらぬあしたの光をそ見る

同六日御詠

あさ日かけのとけき御代の初風に雲もかゝらぬ山のはの哉

御返し　範政

吹まよふ秋のあらしにさそはれて雲ゐにわたる初かりの声

実雅　三条侯

我君のたえぬ御代まて出る日の光そのとけき白雲もかゝらす

あさひかけたゆる事なきしつかなる世にこそいかはかりの春

君かつく御影にひかりも絶す千とせ

あかなれは今朝も山のはの雲もけふの錦にかけてそ見る

烟真居士　山名金吾

雲やこれ嵐にさそはれ秋の月今宵の光そかはらぬ

雅世朝臣 飛鳥井殿

富士乃ねも雪にいくよ万代をつまんためしならしこそ見よ

白妙に見る富士をかけてはるかにも日かけに出る山のはもなし

尭孝 常光院

仰き見て君か御代こそ久方の神代の今も名高き富士にも似る

持信 一色左京大夫

君か代をあふきて八百万代のすゑまてやはらくえやたかき富士のしら雪

持春 細川下野守

富士乃ねも雲居をとゝろかす君か御代にしられぬ名をなす

持賢 同右馬頭

あさらかの時代そまつる雪を光てうつる富士のたかねよ

凞貴 山名中務大輔

まれなる風もなく春しき物を見て富士の雲のなかに見ゆる雲

同日百首御詠

あとに山の月ちかくまて夕日数をなし成のみ遠のたかねに

御製

範政

はる見えて富士や山のいぬ入風の吹わたる日数のふしの白雪

又御詠

いつも見しよすかやいそぬる富士川の波をたつぬと胡のなかめし

仰の色し

範政

富士河の流て盡ぬ君か代を生る民は盡ぬかきりなし

清見か関御覧

きゝしよりきよらぬ御代も清らかに見るに富士三保の松原はれ過し　範政

吹風も松さへ聲も御代はきこえ見えて戸さしも絶ぬ浪の音　雅世

おもしろき三保の浦波松の葉の代々をかけつゝ君を待まん　姻芸居士

来ふ夕暮と見ても清見潟かけて世の流れこそ富士のしらなみ

又御詠

富士の根を見る山もなき都にはへだゝらぬ人に語らむ

御返し　範政

あふぎ見る君がひかりて富士の根も谷の紅葉を照らし　雅世

見ねば猶やまぬ秋の富士の根の白雪は夏をもしらぬ雪

御前にして富士一折御連歌の發句

いく秋の風をおひのふじの嶺しら雪

御脇　範政

秀ともよみし松の紫

御第三

こゆる月とおもふや明石かた

又御詠

あつまやる時そしらぬとはとふしのゝ雪はちとせしめ峯

御返し　熙貴

御世の中に時代のまつもまた袖にもあれすきの白雪

又御詠

あきらし出風をさきてよそ見る秋の御よとおもふに

御返し　範政

我身のこゝろある御代のかゝみさよたえせぬ秋の数かそへ

熙貴にての御詠

我ためにあらたなる光みちいつる御代の流れもたゆることなし

としあけても君が御代にのこりなくもてなすことの恵は

御返し　熙貴

今はやまうけて人をあらためてまてりし住めるなし

みくらの中にわれ知らぬ春の千代をかそふる千つよろつ

還御之時塩見坂にての御詠

いはうやいきこしはおもひはれて今こゝろゆく

けふ毎月にわかれすゝめたちてそ雲のかゝりてまて

御返し　範政

行とてもしらぬ山風ふくからに雲のたえまも八重をなす

隠居の頃より高の御發句

あさきりに中しのゝめの川隠居さう

御詠

秋霧にふしの姿もしはしにかくれ果て最中もまたくはやならむ

清之人し　雅世

冨士乃根は高き月こそ円とも見や君のもとの花とこそ今も

堯孝

霞たつ姿の峯も姿しきやたゝ秋乃朝き風す八しいしも

ふし乃根乃月と雪とのめつらし川のまへつ寸ゆるの下見ゆるとの

嫺真居士

中ゝ姿の名なかくさしをき吾あさ見つる姿やたゝくかほるらん　拜

此紙は清にもく次第々次みしはて如右為出と云々
はなはしかく可然候也
諸大名は供衆其外の外様衆并奉行衆随等
面々之者共諸人なと三十人下男已下白米雑事
雑具各同し如此味細の事ともまはすいらすして
させへとも昔ははさ様の儀なとも志なしめさるを外さあり
く作御分国まて国まて悉く此御事ありぬ共
其のこま内寺社なお頂は成敗にあらすいらぬ此の
御まちよひ中はけりや諸大名高家に八は風呂
湯殿の御用意御構共茶等萬端已下毎々の

事まて悉門坊并什具に拘はらし来これやうにおわしまさり
是非共只昔の其成くつしのはおかなへて自他の忠志
随とも志みしめすへくも委細に御知らし梅はさまては
大ぬ座ゆりり何事もなく文大やうめやはんへつらん大名
田もなしもたかくはなわ人まけりしも御供衆
外様衆共も此次第のまてくは知らて肝要は此一冊
其も細川下野守同右馬頭山名中務大輔なとは御供衆と
みへは有てもとむしまは迷ひ不りまえしてる乗同のこまく
其よは都鄙みなれたくんともに何事もしく善悪は
ぬやうりりるは作法とも若くるまて此次第八は存知しへ

巻三百三十五　三十五

よくはやむとうら跡と注すてはらく当座ある人々とも候得り
上作過る物ゝ足数一笑ゝゝ

八旬有餘宗長

冨士歴覧記

入道中納言雅康卿

明應八年五月三日冨士歴覧のためにおもひ立
侍りて江州柏木といふ所に泊りて四日九里を立ち
侍るに社頭を見しからたゝくまいりかたき

末もまた猶たのみある神垣に思ひ立ぬる旅も道をも

内白川外白川といふ川の水まさりて人々わたり
かね侍るハ心みちらに祈念侍るに

敷しまの道を守らは神垣をわけゆく今日の白川もやすく渡らん

山中と申所まで打こえ侍るに
よふて急き過かと聞し山中におちるかくもはるかなる